



* C C 1 2 0 7 0 9 0 0 0 0 0 4 7 2 *

10日付 山城A朝刊通し
2018年08月07日14時43分55秒
PDFゲラ出力 箱組

◎E・新随想箱
ID=CC12070900000472
校正回数=65 79倍 0× 23行 0

随想やましろ

高校生の時、友人から翌年の受験校の一つに東京の大学も考えてみないかと誘われました。とはいうものの、京都の高校生には東京での学生生活は想像しがたいものでした。しかし友人と東京の大学の合格ラインを検討していくうちに、東京での学生生活を本気に考えるようになりまし。親の強い反対がなかったこともその理由です。



門阪庄三

何をおいてもまず親からの脱出と思っていたのでしよう。若者らしいと言えはそうです。そして翌春、なんとか東京の大学に居場所を見つけたことができました。

残してくれたもの

もちろん最初は新鮮な生活ではありましたが、刺激の少ない沈滞した季節を送ることになりました。

学友との交遊がもたらしてくれるはずの独立が、離れたと思っていた母親との手紙の交換で進んだように思います。

当時の親からの毎月の仕送りは、母から書留で届きました。そしてその書留には必ず母から手紙が添えてありました。最初は「風邪を引かぬように」など平凡なものでしたが、手紙の交換につれて少しずつ変化してきました。言葉の端々に母親が私のことを大学生と見なしてくれるようになってきました。叱るのではない文章、例えば「大学生活で得た友人の大切さ」を諭す手紙もありました。

抱えるように育ててくれた時代とは違って、母親が自分のことを認めてくれるようになった。それにつれて私の心構えも変わり、自立に向かっていくように思いました。今思うと、この時期と母親の食道がん闘病時期が、母との距離が一番近かったような気がしています。人生には皮肉なことが満ちていて、残念なことがあふれている。(かどさか内科クリニック)